矢澤達宏君学位請求論文審査報告

1．論文の位置づけ

矢澤達宏君により提出された博士学位請求論文「ブラジル黒人運動にとってのアフリカ――ブラック・ディアスポラが父祖の地に向けるまなざしの諸相」は、ブラジル黒人の「地位向上、境遇改善、自己認識」における「アフリカ」の捉え方を基本的に言説分析の手法を使って跡付けようとしたものである。この論文の問題意識は、一九八〇年代以降にアフリカを自らのルーツとして肯定的、積極的に位置づけることが、ブラジルの黒人にとって珍しくなくなる以前の時期に、彼らがアフリカをどのようにとらえ、それはどのように変化してきたのか、そしてアフリカに対する相異なる姿勢をそれぞれ規定していたのはいかなる要因であったのか、というところにある。

本論文は、一九世紀以降一九七〇年代に至るまでの時期におけるアフリカに対するブラジルの黒人の認識とその変化、そしていわばアンビバレントな姿勢を、1．一九世紀におけるブラジルからのアフリカへの黒人の帰還、2．一九二〇年代から三〇年年代のサンパウロを中心とする黒人新聞と黒人運動、そして3．一九六〇年代から七〇年代におけるアブディアス・ド・ナシメントの黒人解放思想という三つの事象に着目し、米国とも共通する時代背景（黒人に対する迫害、人種主義思想、アフリカの独立と名誉回復など）とともに、米国とは異なる地域的要因（アフリカ生まれの奴隷の多さ、人種主義不在という認識、人種の混血を核とするナショナル・アイデンティティなど）がそれぞれの局面で関わっていたことを指摘する。そして本論文の問題設定にもとづいて、ブラック・ディアスポラとアフリカとの関係性には米国や英語圏・仏語圏カリブとは異なるヴァリエーションが存在し、そこには地域固有の諸要因が関わっていることをブラジルのケースで実証的に検証している。

2．論文の構成と概要

序論

第1章　ブラック・ディアスポラ研究とブラジル

第1節　問題の所在と問題意識

第1項　ブラック・ディアスポラと父祖の地アフリカ
第2項　ブラジルの「アフリカ性」をめぐる相克
第2節　先行研究と分析の視座
第1項　ブラック・ディアスポラに対する分析枠組みの変遷
第2項　本研究の視座
第3項　ブラジル黒人のアフリカに対する姿勢をめぐる先行研究
第3節　分析対象、問題設定および構成
第1項　ブラジルにおける黒人
第2項　分析対象とする局面と問題の設定
第3項　構成
第I部　一九世紀におけるアフリカへの「帰還」
第2章　ブラジル黒人のアフリカ「帰還」――その象徴性をめぐって
第1節　問題意識、先行研究および問題設定
第2節　「帰還」現象の概要――背景、経緯、帰結
第1項　奴隷貿易の推移と一九世紀前半のバイーア
第2項　マレー反乱と「帰還」の気運
第3項　「ブラジル帰り」コミュニティ
第3節　アフリカへの「帰還」をめぐる考察
第1項　ブラジルからアフリカへの「帰還」現象の特徴
第2項　米国黒人のリベリア入植との比較
第4節　結語
第II部　一九二〇～一九三〇年代のサンパウロ州における黒人運動と黒人新聞
第3章　二〇世紀前半のサンパウロ州における黒人運動の性格と動態
第1節　問題意識
第2節　先行研究の整理と問題設定
第3節　二〇世紀前半のサンパウロ州における黒人運動の展開
第1項　揺籃期（一九〇三～一九二六年）――黒人社交クラブの形成と黒人新聞の登場
第2項　形成期（一九二六～一九三一年）――運動の顕在化と統一の試み
第3項　高揚期（一九三一～一九三七年）――ブラジル黒人戦線による運動の大衆化
第4節　結語
第4章　黒人新聞のなかのアフリカとアフリカ系人――

「アフリカ性」に対する忌避
第1節　問題意識、先行研究および問題設定
第2節　アフリカとブラック・ディアスポラに関する記事の分析
——トピックの選定と論調にみられる傾向
第1項　アフリカおよびアフリカ人に関する記事
第2項　ブラック・ディアスポラおよびパン・アフリカニズム運動に関する記事
第3項　全体としての評価と記事の背後にある意図
第3節　アフリカ志向性の希薄さ——その外因性の当否をめぐって
第4節　結語
第5章　黒人新聞の言説にみる人種とネイション——混血のブラジル人への固執
第1節　問題意識
第2節　先行研究の整理と問題設定
第3節　「人種の天国」言説と黒人を含む「ブラジル人」の構想
——フレイレの議論の源流
第4節　「人種の天国」言説と差別体験の狭間で
第1項　人種偏見・差別の認知をめぐる論調の揺らぎ
第2項　規範としての「人種の天国」とその限界
第3項　制約としての「人種の天国」言説
第5節　黒人を中心的要素とするネイション像
第1項　ブラジル人としての正統性の主張
第2項　ネイションと人種をめぐる言説の影響
第6節　結語
第Ⅲ部　一九六〇年代後半～一九七〇年代における黒人解放思想
第6章　ブラジルをブラック・アトランティックのなかに位置づける
——アブディアス・ド・ナシメントの思想におけるアフリカ志向とその背景
第1節　問題意識
第2節　先行研究の整理と問題設定
第3節　ブラジル黒人運動史におけるアブディアスの位置づけ
第4節　アブディアスの思想におけるアフリカ志向とその背景
第1項　キロンビズモの概要
第2項　キロンビズモにおけるアフリカ志向の要点

第3項　アフリカと結びつける各論点の発現時期
第5節　アフリカ志向の淵源をめぐって
第1項　アフリカと結びつける各論点の由来
第2項　知識人への反発が加速させたアフリカ性の追求
第6節　結語
結論
第7章　まとめと課題
第1節　明らかにしたこと
第2節　残された課題
付録　二〇世紀前半のサンパウロ州における黒人新聞紙面資料
参照・引用資料

本論文は、序論と結論を除く本論の部分は大きく三部に分けられており、第Ⅰ部は一九世紀におけるブラジルからアフリカへの黒人の帰還を、第Ⅱ部は一九二〇～三〇年代のサンパウロにおける黒人運動を、そして第Ⅲ部はアブディアスの黒人解放思想を、それぞれ取り上げている。このうち第Ⅱ部のみさらに三つの章に分けられ、それぞれ当該時期の黒人運動の展開、黒人新聞のアフリカ／黒人についての論調、同じく黒人新聞に見る人種・ネイションの認識にあてられている。以下、各章ごとに議論の要諦を追う。

序論として位置づけられる第1章は、この論文全体の根底にある問題意識を提示し、それに関連する研究の展開と現状を確認した上で、分析の視座と具体的な分析対象を明確にして、問題設定を行っている。

ブラック・ディアスポラの父祖の地アフリカに対する姿勢を左右するのは一体何なのか。米州や欧州の黒人たちの間では一九世紀から自らとアフリカを結びつける動きが見られ、二〇世紀後半に入りアフリカが植民地支配から独立を果たすと、そうした志向はさらに顕著になった。しかしその一方で、二〇世紀前半まではアフリカというルーツを封印しようとする姿勢がむしろ大勢であったし、現在でもアフリカ志向は普遍的であるとは言い難い。そうした両義性の中でも特に、ブラジルのように黒人人口が多く、アフリカからの文化的影響も色濃い国が、ブラック・ディアスポラとアフリカの連帯を模索するパン・アフリカニズム運動にはほとんど関わってこなかった。なぜなのだろうか。こうした疑問を背景に提起されるのが、本論文の問題意識である。実際のところ、ブラジルの黒人はアフリカをどのようにとらえ、それはどう推移してきたのか、そしてそれ

らを規定していたのは何であったのか。

続いて、先行研究のレビューが行われ、ブラジル黒人に限らず、ブラック・ディアスポラ一般とアフリカとの関係性をめぐる研究動向に関しては、個別の事象の分析の単なる寄せ集めになってしまうか、あるいは黒人のアフリカ志向を安直に絶対視した恣意的な見方に陥ってしまいがちで、体系的で深みのある研究は必ずしもできていないことが指摘される。ただ、視座に関しては従来の研究の問題点を踏まえてポール・ギルロイが提起した諸点には有用なものがあると評価する。とりわけ、ブラック・ディアスポラのアフリカに対する肯定的な姿勢を安易に所与のものとすべきではないこと、ディアスポラのありようを規定するのは共通のルーツのみではなく、それぞれ異なる今いる場所も同等の要因だとすることは、本論文の分析視角に組み入れるべきポイントだとする。それを反映させたのが、ブラジル黒人のアフリカへの姿勢の推移について、それが消極的、否定的となる場合も織り込んだ上で、その規定要因をブラジルという地域固有のものも念頭に置きながら探っていくというアプローチである。

続いて直接の分析対象の絞り込みが行われる。まずブラジルにおける黒人の位置づけおよび人種関係の推移と現状を簡潔に概観した上で、アフリカに対する姿勢を測れるだけの材料があるか、入手可能な一次資料、二次資料が必要最低限あるか、さらには互いに異なるアフリカ志向を体現しているか、といった観点から、次の三つの事象が選び出される。すなわち、一九世紀におけるブラジルからアフリカへの黒人の帰還、一九二〇～三〇年代のサンパウロを中心とする黒人新聞と黒人運動、一九六〇～七〇年代におけるアブディアス・ド・ナシメントの黒人解放思想である。最後にこれら三つの事象に対応した次章以降の構成が示され、第1章は締めくくられる。

第Ⅰ部に相当する第2章は、一九世紀のブラジル北東部のバイーアから西アフリカのベニン湾岸への黒人の帰還現象を題材に考察を行っている。一九世紀のブラック・ディアスポラのアフリカへの帰還といえば、リベリアの建国に至った米国からのものがよく知られるが、ブラジルからも一部の黒人がアフリカへと帰還した事実がある。米国では一部の黒人指導者がアフリカ帰還を黒人の境遇改善のための契機ととらえ、熱心に後押しをする一幕もあったが、ブラジルからの帰還はどのように評価できるのか。こうした問題意識に依拠し、先行研究の成果を整理しながら、米国からの帰還のケースと比較考察を行うことで、ブラジルか

らの帰還の持つ意味について検討するのが第2章である。

まずはバイーアからベニン湾岸への黒人帰還現象の概要が明らかにされる。ブラジルが奴隷貿易を停止する直前にあたる一九世紀前半、奴隷の需要が旺盛だったバイーアには、供給が豊富だったベニン湾岸からアフリカ人が大量に流入し、出自の近いアフリカ生まれの黒人の比率がきわめて高い特異な社会が現出していた。他方で同時期のバイーアでは奴隷反乱が頻発し、白人は黒人への不安を募らせてもいた。そうしたなか一八三五年に発生したマレー反乱はその規模が未曾有のものであったことから、当局は検挙者の一部をアフリカへ強制送還した。これがバイーアからの帰還の最初となったが、他のアフリカ生まれの自由黒人に対しても当局は弾圧を強化したため、その後も「自主的」なかたちで黒人の帰還は続いた。その結果、二〇世紀初頭までに約八〇〇〇の黒人がブラジルからベニン湾岸各地に渡り、植民地体制下における富裕層を形成していった。

続いて米国黒人のアフリカ帰還との比較を通じた考察が行われる。米国から帰還した黒人にとって自らが建国したリベリアとは、なにより米国において否定された権利を回復するための場所であって、「故郷」といっても象徴的な意味合いが強かった。それに比べると、もともとアフリカ生まれの者が多かったブラジルからの帰還者たちにとって、ベニン湾岸は本来的な意味での故郷と概ね合致していた。だからといって、バイーアにも黒人に対する迫害があったことや、「ブラジル帰り」という立場を利用した交易などの経済的成功の機会も潜んでいたことから、単なる「望郷の念」からの帰郷であったとは評価しえないと指摘する。ただ、いずれにせよブラジルから帰還した黒人にとってのアフリカは、リベリアのケースと比べ象徴性の低い、現実のアフリカであったと結論づけている。

次の第Ⅱ部は三つの章で構成され、一九二〇〜三〇年代のサンパウロにおける黒人新聞と黒人運動をとりあげ、分析を行っている。第4章、第5章で黒人新聞を主な材料にアフリカに対する姿勢とその背景を探るための予備段階として、第3章では黒人新聞の母胎であった黒人運動の展開を跡付けている。

第3章はまず、資料と先行研究の確認から始まる。この主題に関しては、一次資料である黒人新聞、そして黒人新聞と一部は黒人運動家への聴き取りにも基づいた先行研究の成果に加え、二〇世紀末には黒人運動家の回想録も複数出版された。ただ、従来の研究は主としてこの時期の黒人運動を総体として見たときの特徴や意味を見いだすことに

精力を傾け、逆に運動内部の多様性や動態には関心を向けてこなかったと指摘する。第3章の目的は、一義的には上記の各種資料をつなぎ合わせたり、照らし合わせたりすることで、黒人運動の展開の全容を描き出すことに設定されるが、黒人運動家間の相違や対立に特に留意することも合わせて掲げられる。

黒人運動の起源を辿ると、急速な近代化が進みつつあった都市部で二〇世紀初頭に誕生し始めた黒人社交クラブに行き着く。その構成員は黒人のなかでも中産階級に上昇しつつあった人々で、その活動の特徴はダンスパーティーの開催など、白人的な行動規範への執着にあった。しかし後に黒人運動の担い手となったのは、そうした中産階級の黒人のなかでも一部で、その他の人々は黒人大衆と同一視されることを恐れ、運動に関わろうとはしなかった。

一九二〇年代になると『夜明けのラッパ』、『ジェトゥリーノ』といった黒人新聞が登場し、次第に黒人団結の訴えや人種差別への抗議が表明されるようになった。運動家相互間の交流や連携なども見られるようになった一方、相互間の対立や抗争も生じ始めた。とりわけ一九三一年に創設された黒人組織、ブラジル黒人戦線（FNB）は『夜明けのラッパ』からの批判を受け、同紙編集部を襲撃するという挙にまで出た。こうした対立の発端はそもそも、黒人の境遇改善のため有力政治家に接近するとともに、自らも選挙政治への参与を試みるといった黒人戦線の戦略に対する『夜明けのラッパ』紙の不信感にあったと分析される。運動組織を政党化した結果、黒人戦線を待ち受けていたのは一九三七年に成立した独裁体制による全ての政党の解散命令であった。そのようにして、サンパウロの黒人運動はいったん終息を迎える。

こうした黒人運動のありようを踏まえつつ、黒人新聞の記事を材料にアフリカに対する姿勢を見極めようとするのが第4章である。この主題に取り組んだ数少ない先行研究は、的確な見通しを提示してはいるが、十分な論証がなされているとは言えないと指摘する。続いて、アフリカ、そしてブラジル以外のブラック・ディアスポラという二つの主題に関する記事を対象とした網羅的な分析に移るが、まずはそれらが黒人新聞において中心的な主題ではなかったことが確認される。ただ、アフリカへの言及を少ないとし、その理由の一端をアフリカについての知識不足とする先行研究の見解に対しては疑問を呈する。ブラジル黒人の団結や人種差別の批判といった中心的主題でない割には、必ずしも少ないとは言えないと見る。注目すべきはむしろ選択

される話題の傾向であり、アフリカ人にせよ、米国やヨーロッパの黒人にせよ、西洋的基準から評価される人物が目立つ。他方で、自分たちをアフリカと結びつけるアフロ・ブラジル文化を含めて、言うなれば「アフリカ的なアフリカ」にはほとんど言及されていないと指摘する。

また、取り上げられる場合でも他紙からの転載が多く、それらについて自分たちの意見等が表明されることはまれで、例外は否定的な見解が明確に示されている米国黒人の分離主義的な運動の話題くらいだとする。こうしたアフリカやブラック・ディアスポラの扱われ方から、それらはブラジル黒人読者の意識向上といった程度の限定的な目的で言及されたに過ぎず、同時期に展開されたパン・アフリカニズム運動などへの共感までそこに読み取るのは行き過ぎだと結論づける。特にアフリカ性に対しては忌避の姿勢が明白だとする。ただ、その理由はブラジル黒人の孤立やアフリカについての知識不足などではなく、むしろブラジル黒人運動に内在する要因に求めるべきだとして第4章は締めくくられる。

第4章の分析を受け、ブラジル黒人運動のアフリカ志向性が希薄な理由を探ろうとするのが第5章である。いくつかの先行研究は、ブラジルの黒人が自分たちを混血のネイションであるブラジル人の一部だと考える意識を強く持ち、いずれブラジル社会の対等な一員になると信じていると指摘する。そこで、異人種間で混血が進み、相互の関係が調和的な社会というブラジルの伝統的なとらえ方がブラジル黒人の統合志向に関係しているのではないかという仮説を立て、第4章と同じくサンパウロの黒人新聞記事を材料として用いて、黒人運動家が人種やネイションについてどのような認識を持っていたかを実証するという問題設定がなされる。

人種間の対立がない社会という認識を決定づけたのは、ジルベルト・フレイレが一九三〇年代に提起した「人種民主主義」という見方であったが、それより前から主に米国との対比により、「人種の天国」といった表現でブラジルには人種の壁が存在しないというイメージが存在していたことがまずは確認される。それが、一九二〇～三〇年代に発行された黒人新聞の論調にも影響を与えていたのかが検証される。人種差別の具体的な事例を取り上げて告発することと、ブラジルは人種主義の存在しない社会だと主張することは矛盾するはずだが、どちらの記事も黒人新聞には見られた。本来のブラジルは人種問題などあるべきでない社会で、そこから逸脱した例外として人種主義を戒めるス

タンスとも解釈できるが、本質的にはむしろ、あるはずのない人種問題を煽り立てているという白人主流社会からの非難に対する釈明の要素が強いと分析される。

一方、ブラジルを異人種間の混血からなるネイションととらえる考え方も一九世紀から存在し、黒人新聞紙上でも繰り返し表明された。しかしながら一九世紀末以降、人種主義の影響でヨーロッパ人移民の大量導入とそれとの混血を通じてブラジル人を人種的に白人に近づけようとする「白色化」への志向も浮上するなど、ネイションをめぐる見方は知識人の間でも揺れ動いた。こうした状況において黒人新聞は「白色化」に対しては断固とした拒絶を示したものの、知識人の間の論議に立ち入ることはなく、著名人による都合のよい一節をあれこれ援用しつつ、自分たちもブラジル人の正統なる一員であることを訴えた。

こうしたことから、必ずしも直接的にという訳ではないものの、ブラジルの人種・ネイションにまつわる既成概念がブラジル黒人の統合志向に関わっていたと結論づける。

第Ⅲ部に該当する第6章において、矢澤君は二〇世紀前半のブラジルで見られたアフリカに対する否定的な姿勢が、一九八〇年代以降の肯定的な見方へといかなる変化のプロセスを経ていったのか、という問題意識にもとづき、黒人実験劇場（ＴＥＮ）の創設者アブディアス・ド・ナシメントの黒人解放思想を検討している。筆者のアブディアス・ド・ナシメント論の最大の特徴は、アブディアス自身の思想も、ブラジルの黒人運動も、一九六〇年代後半に「転換点」を迎え、「アフリカ」志向に変化したとし、その要因を探ろうとしている点である。

アブディアスはブラジルが軍部独裁体制へと移行した後の一九六八年、訪米中に強権体制が強化されたために帰国できなくなり、一九八一年までをそこで過ごした。その間、当地の黒人運動家や様々な地域のパン・アフリカニストと交流を深め、それが彼をアフリカ志向に目覚めさせたと考えられることが多い。しかし、先行研究の中には、渡米前の時点で、国外からの思想的影響により、彼の主張にはアフリカ志向がすでに発現していたとみるものもある。そこで、この指摘が妥当かどうか検証しながら、アブディアスの論稿の分析が進められる。

アブディアスの思想の一つの完成形とされているのが、一九八〇年に発表されたキロンビズモという概念である。このなかでアフリカは、歴史的経験、こんにち直面する問題、そしてヨーロッパとは異なる社会文化的特質をブラジル黒人と共有する存在として位置づけられる。つまり、ブ

ラジルの黒人もアフリカと同様、人種主義、ヨーロッパ中心主義的な見方に苦しめられ、ヨーロッパで発展してきた資本主義のシステムとは文化的に相容れないとの解釈である。そして先行研究の指摘の通り、こうした思想の概要は渡米直前に発表された論考にはすでに見られることが確認される。

ただし、何がアフリカ志向を覚醒させたかに関しては、先行研究は国外からの影響による説明に偏重していると異を唱える。国外からのネグリチュードや民族解放思想などの影響は認めつつも、ヨーロッパとは異質なアフリカ的価値への傾倒は、ブラジル国内の知識人に対する不信によっても相当に後押しされた面があったとみる。運動家としてのキャリアの初期には進歩的知識人との共闘を模索したものの、人種民主主義の例に見られるように、「科学」の名の下に人種主義の存在を隠蔽しようとする彼らにアブディアスは徐々に不信感を募らせていった。くわえてキロンビズモをブラジル黒人固有の「科学」的概念とあえて形容していることにも、ヨーロッパ中心主義的な科学に対する反発を読み取っている。

結論にあたる第7章においては、各章における議論を整理しながら、分析対象とした三つの事象から導き出されたアフリカに対する姿勢にあらためて焦点を合わせ、その相異、対照性を確認する。一方、残された課題として二つの点を挙げる。一つは三つの事象が、バイーア、サンパウロ、リオデジャネイロとそれぞれ異なる地域を舞台としていたにもかかわらず、必ずしも地域的要因を十分に踏まえた分析とはなっていない点である。もう一つは、第3章で黒人運動内部の動態の実相、とりわけその多様性を明らかにしながら、その後の第4章、第5章では、限られた数の黒人新聞という資料上の制約もあり、その視点を十分に展開できていない点である。

3. 論文の評価

本論文の評価に関してまず特筆すべき以下の四点を指摘したい。①日本においてはほとんど未開拓の研究テーマに取り組み、先行研究を博捜して問題設定を行なっていること、②黒人新聞という入手困難な一次資料を粘り強く探し求めて綿密な分析を行なっていること、③ブラジル黒人の「アフリカ」イメージの分析を通して、環大西洋世界に「離散」したアフリカ系の人々によるコミュニティやアイデンティティの構築の多様性を浮き彫りにしたこと、④環大西洋世界における黒人運動のネットワーク、とりわけ北

大西洋とは異なる南大西洋におけるネットワークの独自性に注目し、ブラジルと西アフリカの「ヒト・モノ・文化」の交流の実態を描き出したこと、である。そして各章における問題設定と論証の堅実さは積極的に評価されるべきであろう。結論の斬新さにはやや物足りなさが感じられるかもしれないが、先行研究についての的確な分析と評価、それを踏まえた問題設定と議論の組み立て、論証の手法はいずれも非常に手堅いものとなっている。第4章、第5章、第6章は黒人新聞の記事、黒人運動家の論稿や回想録など、現在利用可能な一次資料に網羅的にあたり、丹念に裏付けをとりながら議論を進めている。とりわけ本論文の核心部分とも言える第Ⅱ部を構成する二つの章は、利用可能な黒人新聞を最大限に収集し、その記事の分析から初期のサンパウロにおける黒人運動の実態と、サンパウロの黒人の「アフリカ」をめぐる意識・認識を深く分析したものであり、この実証性の高さこそ主題を同じくする数々の先行研究から本論文を差異化しているものであり、きわめて高く評価されるべき点である。

一方、論文全体としての問題設定の方は、逆に極めて独創性の高いものだと言える。ブラック・ディアスポラとアフリカの関わりに関する研究は、一般論、事例研究ともに近年、進展が著しい。しかしながら、両方をしっかりと組み合わせた研究は意外なほどに少ない。一般論の方は事例による検証が十分とは言えず、事例研究の方は必ずしも一般論を踏まえた視角から分析がなされていない傾向にある。本論文は、基本的には事例研究の範疇に入るものではあるが、その問題設定は近年の一般論の進展をしっかりと反映し、論証の結果が一般論のさらなる発展への貢献となることも意識したものになっている。具体的に言うと、ブラック・ディアスポラのアフリカに対する姿勢は一定、一様とは限らず、地域の違いによっても左右されるという前提に立ち、一般論を検討する際にほとんど取り上げられなかったブラジルにあえて照準を合わせることによって、地域的要因がブラック・ディアスポラのアフリカ志向のありようにどのような影響を及ぼしうるのかを探ることを意図している。しかも、同じブラジル黒人のアフリカ志向でも、時期の異なる三つの事象からその推移を描き出し、時代的要因などその他の要因を析出することも視野に入れている。アフリカ志向という一貫した視点から複数の事象を分析し、その相異や背景まで考察しているものは、わが国では言うまでもなく、欧米はもちろん、ブラジルにおいても皆無に等しい。したがって、研究プロジェクト全体としてはすぐ

れて野心的なものと評価できよう。

だが問題点、課題も散在する。本論文は、第Ⅰ部がバイーア（サルヴァドル）、第Ⅱ部がサンパウロ、第Ⅲ部がリオデジャネイロを舞台としている。それぞれの時代に見るべき動きがあった地域といえばその通りであるが、この三つの地域の社会とりわけアフリカ系の人々の存在形態についてのさらに詳しい説明が欲しいところである。

序論、第1章に関しては、一九八八年憲法のアフロ・ブラジル文化をめぐる規定に関連して、こうした規定を憲法に書き込むため、黒人運動が積極的に関与したことをもう少し強調しても良かったであろう。また労働者党政権の政策に関連して、政党と黒人運動の関係についてもさらに分析を深める必要を感じる。

第Ⅰ部については、事実関係に関して、二点、さらなる補足、検討が必要であると思われる。すなわち①奴隷の捕獲地と「帰還」地は必ずしも一致しないであろうこと、②バイーア（サルヴァドル）は、ブラジル有数の奴隷受け入れ港であったことは確かであるが、時代にもよるが、最大とまで言いきれるかどうかということ、である。

第Ⅱ部については、以下の五点を指摘したい。①人種差別反対や権利獲得のための社会運動、さらには黒人政党結成に至る政治活動が、なぜサンパウロで先鋭化したのかの理由をもう少し深めるとともに、「ブラジル人」であるサンパウロの黒人が「外国人」であるヨーロッパ移民をどのように見ていたのか、という点を黒人新聞の記事の分析から論じてほしかった。また、サンパウロと黒人新聞の発祥地であるカンピナスの地域的な性格の違いにも注意が必要であろう。②黒人新聞の紙面構成の一部をなす社交欄やコミュニティの話題などによって、この時代のサンパウロ黒人の社会的上昇の意欲や主流社会への同化志向のあり方が確認されるべきであろう。③黒人運動の系譜に関して挙げられた個々の活動家についてもさらに詳しい説明が求められる。④ブラジル黒人戦線（ＦＮＢ）をめぐる事実認識についてもさらに詰めるべき点が散見される。⑤第5章について一九三〇年代のヴァルガス政権のナショナリズム政策、とりわけ移民制限とブラジル国民優先をサンパウロの黒人がどう受け止めたかを正面から論じるべきであろう。

第Ⅲ部第6章については、以下の二点を指摘しておきたい。①アブディアス・ド・ナシメントの「アフリカ」志向については、米国時代に描き始めた絵画のモチーフも資料として貴重であり、参照されるべきであろう。②一九三〇年代のジルベルト・フレイレが中心となって開催されたア

フロ・ブラジル会議以来、白人研究者と黒人インフォーマントという関係がさまざまな軋轢を起こしてきたことは確かであろうが、その責任を黒人の側に求めるのはやや酷な感じがする。

結論にあたる第7章では自ら二つの課題を挙げているが、とくに三つの事象が生起した（ブラジル内の）地域の相違という一点目は、論文の根幹に関わる点である。当然、地域の違いがアフリカへの姿勢のありようを左右する面はあったであろう。バイーア、サンパウロ、リオデジャネイロと別々の場所を背景に表明されてきた対照的なアフリカへの姿勢を、広くブラジル黒人全体のアフリカ志向の推移とみなすことは、はたしてどの程度妥当なのであろうか。

本論文の問題意識に照らせば、三つの事象は分析対象として妥当であろうし、資料面の制約から選択の余地がおのずと少なくなることも理解できるが、結論部分においてそれらの事象がブラジルの黒人運動全体のなかでどのように位置づけられるのか、もう少し踏み込んだ議論があってもよかったと思われる。また結論に関していささか物足りないと思われる点は、米国のケースと比較した場合、ブラジル黒人のアフリカ志向の特徴について体系的な議論がいささか不十分なことである。各章ごとには米国との対比は言及されてはいるが、結論としてブラジルのケースの特質はどのようなところにあるのかがまとめられていない。

以上のような問題点と課題は、しかしながら本論文の価値をいささかも減じるものではない。それらは今後の課題であり、本論文がこれまで詳細に解き明かされることのなかった問題に果敢に取り組み、高度な学問的成果を生み出すまで分析を進めた結果として、そうした問題点や課題がはじめて明確化されたとの評価を行うべきである。

以上述べた理由により審査員一同は、本論文が博士（法学）（慶應義塾大学）の学位を授与するのに相応しいものと判断する。

二〇一八年一月一九日

主査　慶應義塾大学法学部教授　井上　一明
副査　法学研究科委員・法学博士　出岡　直也
副査　慶應義塾大学法学部教授　鈴木　茂
法学研究科委員
東京外国語大学大学院
総合国際学研究院教授